

現職教員のリフレッシュ教育の現状と課題

－C大学大学院教育学研究科、美術教育専修の事例－

宇田 秀士

(奈良教育大学美術科教育学研究室)

Present Condition and Perspectives on the Refreshment of Teacher
in Inservice Education

－The Case of the Major for Art Education, Graduate Course of C University－

Hideshi UDA

(Department of Art Education, Nara University of Education)

要旨：本学大学院美術教育専攻にもコンスタントに現職教員が入学できる状況ができつつあり、その受け入れ体制・授業内容の再構築が課題となっている。これをふまえて、現職教員が多数入学する他大学院の先行事例を調査し、現職教員のリフレッシュ教育の現状と課題を把握しようと考えた。本稿では、C大学大学院教育学研究科美術教育専修を取り上げ、修了者・入学予定者、並びに大学院で指導にあたる大学教官に対する面接調査及び資料調査を行った。現職教員の勤務状況や学習ニーズ、指導教官の授業内容の工夫、大学院全体の指導体制などを、具体的事例とともに把握することができた。

キーワード：大学院教育学研究科における現職教育、美術教育の実践力の育成

1. はじめに

平成8年(1996)度において、全国の国立教員養成系大学・学部全てに修士課程が設置され、現職教員の生涯にわたる資質能力の向上のために修士課程における再教育の充実が課題となっている¹⁾。本学大学院教育学研究科が創設されたのは昭和58年(1983)であり、美術教育専攻も同年に設置されたが、奈良県の長期研修制度の事情もあって現職教員の入学者が少なく、結果としてその再教育の場としては、十分に機能してこなかった。

ところが、平成10年度以降、美術教育専攻にも現職教員がコンスタントに入学し始め、状況が変わりつつあると考えられる²⁾。こうした中で、大学院の教育課程・授業内容の一層の充実をはかるとともに、現職教員の多数入学する実績をもつ他大学大学院の事例を調査し、再教育の現状と課題を把握しようと考えた。

本稿で取り上げるC大学大学院教育学研究科は、平成4年(1992)4月の入学生を第1期としており、全国的には、比較的歴史の浅い大学院に位置づけられる。しかし各専修ともに毎年1～2名程度、大学院設置基準14条による大学院入学者(現職教員)を迎えており、美術教育専修の場合も、既に8名の入学者があった。現職教員受け入れの実績として、本学大学院美術教育専攻

以上のものがあり、参考事例になりうると考えた。

<研究方法>

このうち、修了者3名、入学予定者2名（平成10年2月時点）、並びに、大学院で指導にあたる立場の3名の大学教官（何れも美術科教育分野担当、内一人は名誉教授）に対する面接調査及び資料調査を行い、考察をした。調査時期は、平成10年（1998）2月～12月である。

2. C大学大学院教育学研究科と県の長期研修制度の概要

2.1. C大学大学院教育学研究科の概要

(1) 定員

[学校教育専攻]

学校教育専修 入学定員5名

[教科教育専攻]

国語教育専修 入学定員3名、社会科教育専修 入学定員4名

数学教育専修 入学定員3名、理科教育専修 入学定員4名

音楽教育専修 入学定員3名、美術教育専修 入学定員3名

保健体育専修 入学定員3名、技術教育専修 入学定員3名

家政教育専修 入学定員3名、英語教育専修 入学定員3名

計 入学定員37名

(2) 平成9年度入学者

[学校教育専攻] 16名（うち現職教員5名）

[教科教育専攻] 36名（うち現職教員15名）

計 52名（うち現職教員20名）

(3) 受講科目

研究科共通科目 「現代教育学」「現代教育心理学」必修

以下は、美術教育専修の場合

専修共通科目 「美術教育実践論」

教科教育科目のうち、必修 「美術科教育特論Ⅰ」「美術科授業研究」

2年次にスクーリングする科目 「美術教育特別研究」（木曜4コマ目）

2.2. C県における長期研修制度の概要と大学院入学者のスケジュール

(1) 日程

入学前

○毎年4、5月頃 学校長より希望調査。選択肢は以下の3つ程度

・新構想教育系大学院への入学（2年間の研修）

・内地留学（1年間の研修）県内 教育研究所などでの研修

県外 美術の場合、美術系大学研究生や窯元など

・大学院設置基準14条によるC大学大学院教育学研究科への入学

○希望の集約後 学校長の推薦で地区の話し合いへ 地区より全県の話し合いへ

夏休み後 県の推薦決定

○10月初旬 C大学大学院入学試験・合格

大学院1年目

○1年間の研修（講義受講、修士論文準備）

○年度末 C県庁での研修報告発表会（大学院入学者の場合、中間報告会）

大学院2年目

○美術教育専修の場合、毎週木曜日4コマ目（14：40～）の授業「美術教育特別研究」に出席、その後大学で研修。

・大学院の所在地であるC市内又は近郊に転勤になることも多い。

○1月20日修士論文提出締切、査読、大学内での発表会。

○年度末 C県庁での研修報告発表会

(2) 入学金・授業料の援助

1年目、2年目ともに自己負担。

(3) C大学大学院美術教育専修への現職教員入学者（平成10年（1998）2月調査時）

<修了者>

①平成4年度（1992.4）入学a氏 男性 入学時、教職7年終了。

②平成5年度（1993.4）入学b氏 女性 入学時、教職8年終了。

③平成6年度（1994.4）入学c氏 男性 入学時、教職7年終了。

④平成7年度（1995.4）入学d氏 女性 入学時、教職9年終了。

⑤平成8年度（1996.4）入学e氏 男性 入学時、教職10年終了。

<在学者>

⑥平成9年度（1997.4）入学f氏 男性 入学時、教職18年終了。

<入学予定者>

⑦平成10年度（1998.4）入学g氏 男性 入学時、教職12年終了予定。

⑧平成10年度（1998.4）入学h氏 男性 入学時、教職9年終了予定。

平成9年度を除いて、比較的近い教職経験（7～12年、年齢では29～35歳）で入学している。これは、今回面接した修了者・入学予定者自身の話によれば、勤務校での校務分掌、各地区での役割などから、研修に出やすい時期であるということであった。また、大学院での研修内容が教育現場に活かせる年齢は、30歳台後半までという認識が教育委員会や管理職にあるようで、それ以上の年齢になると長期研修には出にくい雰囲気を感じられるということであった。

3. 現職教員の大学院生の意識

上記8名の修了者・入学予定者のうち、5名に対して、以下のような質問項目を含む1対1の面接調査を行った。3.1.～3.5に各自の質問の回答をまとめた。

【①入学の志望動機】、【②入学決定までの経緯と心的過程】、【③研究テーマ】、【④教職何年目から入学志望をもったか】、【⑤入学は希望して何年かかったか】、【⑥入学前と入学後の違い】、【⑦学業と生活】、【⑧テーマは現場で生かされたか】、【⑨講義内容は、自分の興味・関心にあったものであったか】

3.1. 平成6年度入学、平成7年度修了（美術科教育）C氏（男性）の場合

C大学教育学部小学校課程美術科卒業（卒論研究は、絵画分野）後、山間部小規模中学校勤務（3年間）、平坦部中規模中学校勤務（4年間）の後、大学院に入学。大学院2年目より現在まで、C市内の中学校に勤務（面接時3年目）。

【①入学の志望動機】

まず、それこそリフレッシュ、気分転換をはかりたかった。さらに、日々の授業での疑問を考える研修機会を得たかった。

【②入学決定までの経緯と心的過程】

まず、学部時代の指導教官に相談して情報を集めた。また勤務地区での推薦は、勤務先の校長の尽力もあり、比較的順調に進んだ。全体としてあまり不安はなかった。

【③研究テーマ】

「一般普通教育における美術・図画工作学習の再検討－基礎造形学習のあり方」

【④教職何年目から入学志望をもったか】

教職6年目ぐらい。ちょうどC大学大学院がスタートし、学部時代の2学年上の方が第1期生として入学し身近に感じた。

【⑤入学は希望して何年かかったか】

2年後ぐらい。

【⑥入学前と入学後の違い】

- ・ 漠然とした研究テーマしか持たずに入学したので、大変苦労した。
- ・ 1年目は、時間的な余裕の中で読書の時間もとれ、今まで手にしなかった領域の本も読み教育を見る視野が広がった。また、読書によって学部時代の授業の意味を再確認できる機会ともなった。さらに、指導教授に連れられて県下のユニークな実践校も訪問でき、衝撃を受けた。入学前よりも、広く柔軟な目で教育をみることができるようになったと思う。

【⑦学業と生活】

- ・ 1年目は、東京などの美術館に見学にでかけるなど充実したものとなった。
- ・ 2年目は、入学前に勤務した学校から転勤になったので、新しい学校に慣れるだけでも大変だった。その上での、大学院への通学があったので苦労した。修論の実践事例は、2学期に行ったものを取り入れたので、追い込みもきつくなり徹夜状態も続いた。
- ・ 2年目のスクーリング科目である美術教育特別研究は、修論指導の時間となったが、予定どおり課題が進まず、逃げだしたくなるような苦しさもあった。週1回の木曜日のスクーリングにおける課題ができないときもあり、宿題ができない子どもの気持ちが痛いほど分かった。

【⑧テーマは現場で生かされたか】

それまでは、研究会などで実践事例を見よう見まねで形だけ取り入れたことが多かったが、修論作成を通して授業の背景にあるものを理解できるようになり、価値はあった。

【⑨講義内容は、自分の興味・関心にあったものであったか】

自分の専修の中では、指導教授の授業内容のほか、修論テーマとも関ってデザインの科目が印象に残った。また、専修以外では、教育の背景を考える上で、「研究科共通科目 現代教育学」が興味深かった。直接的に教育現場に生きるわけではないが、制度、学校のあり方を考えるきっかけとなった。

【その他】

入学前には絵画実技の講習会、日本美術教育学会のC県支部の研修などに参加していた。

3.2. 平成7年度入学現職教員、平成8年度修了（美術科教育）d氏（女性）の場合

C大学教育学部小学校課程美術科卒業（卒論研究は、絵画分野）後、平坦部中規模小学校勤務（3年間）、山間部中規模小学校勤務（3年間）、都市部大規模中学校勤務（3年間）の後、大学院に入学。大学院2年目より現在までC市内の中学校に勤務。

【①入学の志望動機】

- ・6年間の小学校勤務の後、中学校勤務を始め、美術の専科として教えるようになって、課題が出てきた。
- ・C県で伝統的に行われている授業研究にも疑問を感じ始めてきたときに、鑑賞教育の教材の開発の必要性を思い立った。

【②入学決定までの経緯と心的過程】

職場の同僚である新構想大学院を卒業された人の話やC大学院にも相談に行き準備を進めた。職場（中学3年生の担任）、私生活（入学直前の3月に結婚）とも忙しい時期であったが、学校長にも支えられ、比較的順調に進んだ。

【③研究テーマ】

「自分らしさを発揮する鑑賞活動の研究」

【④教職何年目から入学志望をもったか】

- ・最初は、5、6年目の小学校勤務の頃。生活科の授業に関心を持って思ったが、自信がなくて挫折。（このときは、新構想大学院の2年コースを希望。）
- ・2度目は、9年目の中学校勤務3年目の頃、ちょうど人事異動のときでもあったので。

【⑤入学は希望して何年かかったか】

いろいろなタイミングがあい、希望した翌年。

【⑥入学前と入学後の違い】

- ・同学部卒だったので、教官スタッフのほとんどは知っており不安はなく、授業内容もおおよそ予想できていた。しかし、例え、同じ内容であったとしても、教職経験を経た後では、実感を伴って聞くことができ、面白く感じた。もちろん新たな内容も付け加えられていた。
- ・大学院の授業の意味として、教育現場に密着した研修的内容と、自分を磨く学的内容との2つがあることを実感した。

【⑦学業と生活】

- ・1年目は、授業を中心に充実していた。2年目は、週1回の授業に出るのにも気を使った。また、まとめる時間を捻出するのに苦労した。
- ・1、2年目ともに、家族（夫）に支えられた。と同時に、指導教授の配慮もいただいた。

【⑧テーマは現場で生かされたか】

- ・1年目のゆったりとした時間の中で授業を受け学習を行い、物事の背景を考えるようになり視野が広がった。
- ・2年目は、修論テーマと授業とを関連させて研究した。

【⑨講義内容は、自分の興味・関心にあったものであったか】

専修では、修論とも関って、＜教科教育、美術理論・美術史、デザイン＞などの科目の中で、鑑賞教育関係や現代デザインの内容が参考になった。専修の科目の他に研究科共通科目の「現

代教育学」や「現代教育心理学」などは、教職経験を生かして聞けたので、面白かった。

【その他】

- 発表形式の授業が多かったので、大学の図書館、市立図書館を利用したが、大学の図書館の方が資料が少なかった。
- 修論については、1年目に8割を終える予定でいて、実際には、4割程度であった。

3.3. 平成8年度入学現職教員、平成9年度修了（美術科教育）e氏（男性）の場合

C大学教育学部小学校課程美術科卒業（卒論研究は、美術科教育分野）後、都市部小学校勤務（4年間、うち特殊学級2年）、山間部中学校勤務（6年間）の後、入学。大学院2年目より現在までC市内の中学校に勤務。

【①入学の志望動機】

- 教職10年目の区切りにあたって、大学の先生の話聞きながら考える時間が欲しかった。現場では、情報の窓口が限られているので、視野を広げたかった。
- 入学前から、指導教授が主宰する美術教育の研究会（年4回）やその全国大会にも積極的に参加していた。したがって、事前に指導を仰いでいたので（学部のときの指導教官ではなかったが）、C大学大学院を希望した。

【②入学決定までの経緯と心的過程】

勤務校の校長に早い時期から、話をして心得てもらっていたので、あまり不安はなかった。すべて、学校長に任せるしかなかったから。

【③研究テーマ】

「子どもの造形経験をひろげる図画工作・美術科の学習のあり方」（現在の子どもの感覚にあう題材、その与え方、進め方）

【④教職何年目から入学志望をもったか】

教職5、6年目の頃・・・C大学大学院開設の頃。それまでは、日本人学校などで海外に赴任して違った視点から教育をみればよいな、と考えていた。

【⑤入学は希望して何年かかったか】

希望してから2、3年

【⑥入学前と入学後の違い】

- 【①入学の志望動機】にもあるように、指導教授に事前に指導を仰いでいたので、内容にもスムーズにとけ込めた。
- 1年目は、今までの10年間の現職教員としての勉強をふり返り、根本的な問題を考えた時期であった。その時期を経ての2年目は、いい意味で、子どもたちががらっと変わったように見えた。目の玉が飛び出るような気分であった。

【⑦学業と生活】

- 1年目、学業、家庭生活（結婚したばかりであった）の両方とも充実していた。
- 2年目は、苦しいことが予想されたので、転勤校の近くに家を借りて通勤時間の短縮をはかるなど工夫した。週1回の大学での研修に出る事にも気を遣った。

【⑧テーマは現場で生かされたか】

修士論文を書き上げたばかりであり、これから、生かしたいと思っているところである。

【⑨講義内容は、自分の興味・関心にあったものであったか】

指導教授の講義内容は、入学前の現場での指導もあったので、継続性があり自分にあったものだった。そのほか、興味味をもった科目として、「研究科共通科目 現代教育学」がある。

【その他】

- ・実践・研究歴として、学部時代より指導教官の下で県内の実践研究会、夏休みの全国大会に参加している。実践・研究歴としては十分な実績を積んでいるが、大学院での全国レベルでの情報収集は、視野の広がりを得られたとふり返っている。
- ・2年目の転勤先が、転勤前の学校の子どもと雰囲気違っていたので実践をするのに、やりにくい面があった。

3.4. 平成10年度入学予定、平成11年度修了予定（美術科教育）g氏（男性）の場合

C大学教育学部小学校課程美術科卒業（卒論研究は、絵画分野）後、山間部小規模中学校勤務（3年間）、都市部大規模中学校勤務（3年間）、都市部中規模中学校勤務（6年間）の後に、大学院入学予定。

【①入学の志望動機】

- ・なかなか自分の時間も取れない、教育現場の慌ただしい生活から解放されたかった。教職12年間ずっと、中学校のクラス担任をしており、1日あるいは半日の研修などにも出にくい状況であった。
- ・普段やっているパソコン教育に関する勉強の機会を確保したかった。
- ・家族、実家のことがあるので、地元の大学院にした。

【②入学決定までの経緯と心的過程】

- ・自分が担任をした学年・クラスが卒業と同時に大学院入学をしたいと考え、担当学年が中2のときに、次年度に希望を出すことを学校長に伝えた。
- ・ところが、勤務校で内地留学、日本人学校に出た同僚教師が二人おり、学校長からの指導で、一度は断念を決意するなど、紆余曲折があり、気持ちの焦りもあった。

【③研究テーマ】

「パソコンを中心としてマルチメディアを利用する美術教育」の予定。パソコン歴が8年ほどあり、教育現場の講習会でも指導を受けていた教育実践研究指導センター所属教官の「メディア教育」講義を楽しみにしている。

【④教職何年目から入学志望をもったか】

教職10年目ぐらい。身近な存在である学部時代の同窓生が大学院に行くようになって。

【⑤入学は希望して何年かかったか】

希望した翌年（【②】のような「経緯」があったが、結果的には希望通りになった。）

【その他】

- ・パソコン教育研究以外では、絵画制作の時間もつくってみたい。
- ・学部時代の卒論研究は制作活動の成果である作品が主であり、本格的な論文となる修士論文に対する不安がある。
- ・また、2年目に現場実践との両立をはかりながらの修論作成となるので、時間の確保ができるか心配である。C県の転任の慣例と自分自身の教職歴からすると、2年目は別な学校に転勤が確実であり、その新しい学校でうまく受け入れてくれるのだろうか。できれば、副担任だとよいのだが。

(入学前なので【⑥】～【⑨】の項目は省いた。)

3.5. 平成10年度入学予定、平成11年度修了予定(構成) h氏(男性)の場合

C大学教育学部小学校課程美術科卒業(卒論研究は、構成分野)後、都市部大規模小学校勤務(4年間)、平坦部中規模小学校勤務(5年間)の後に、大学院入学予定。

【①入学の志望動機】

- ・慌ただしい教育現場から、解放され自分の時間を持ちたかった。また、表現技法の研究を深めたいという思いもあった。
- ・家族もあり、地元の大学院を選択した。

【②入学決定までの経緯と心的過程】

希望してから、毎年校長に伝えていたが、いざ学校内での合意がとれると、不安も出てきた。ある意味で引くに引けない形で、願書の手続きを行った。

【③研究テーマ】

漠然とであるが、「自然物をテーマにした構成に関する研究」又は「マンガに関する研究」を予定している。まだ完全に固まっておらず、今後変化する可能性がある。

【④教職何年目から入学志望をもったか】

6年目ぐらい。

【⑤入学は希望して何年かかったか】

2年

【その他】

学部時代の卒論研究は制作活動の成果である作品が主であり、本格的な論文となる修士論文に対する不安がある。

(入学前なので【⑥】～【⑨】の項目は省いた。)

4. 指導教官の側から

C大学大学院教育学研究科の設置に尽力された i 名誉教授(美術科教育)によれば、設置に向けて、美術科など僅かな学科しかなかった同窓会を、全学科にわたるものとして組織し、さらに県教育委員会、退職校長会などとの会合を設け連携をはかったという。出発点において、地域教育現場との連携の基盤づくりがなされていたといえる。

i 名誉教授の面接調査では、こうした大学院設置までの経緯が話題の中心となった。したがって、誌面の都合上この詳細は省き、現在の美術科教育分野の担当教官である i 教授、k 助教授 2 名の面接内容に入れることにする。

4.1. 美術科教育分野担当 j 教授

j 教授は、平成元年(1989)着任であり、「美術教育実践論」(1年次2単位、実技系教官3名と共同で)、「美術科教育特論 I」(1年次2単位)、「美術科教育演習」(1・2年次2単位、k 助教授と共同で)、「美術科授業研究」(1・2年次2単位、k 助教授と共同で)、「美術教育特別研究」(2年次・4単位)を担当している。C大学着任以前に約20年の他府県での現場経験(小学校)があり、普段から大学と県下とのパイプづくりに努めている。「美術科授業研究」では、県

下の公立校に出向き、院生自身が研究授業をする場を設定している。

【①現職教員を大学院に受け入れることについて 利点、困難な点・改善点】

＜利点＞

経験をもった現職教員と学部卒の現職経験のない院生が、お互いに刺激しあっていること。現職教員院生には、経験を生かして学部卒院生の指導的な役割も担わせるようにして活性化をはかっている。

＜困難な点・改善点＞

特に、2年目に現場に戻っての修論作成に関して、現職教員院生自身が厳しい状況におかれている。その状況の中では、十分な指導もしにくい。県教育委員会は、この制度の趣旨をもっと理解し、充実させる方向でビジョン・実施計画をたてて欲しいと願う。

【②現職教員及び学部卒の大学院生を指導するにあたっての相違点及び工夫点】

＜現職教員院生＞

経験を積み課題意識をもって入学することが多いが、2年目に現場に戻るという制約から、1年目で仮説を立て、2年目で検証するような修論のテーマにする指導をしている。制度上、そうせざるをえないのであるが、テーマを選ぶときの自由度はどうしても少なくなり残念である。また、1年目に3分の2を消化する気持ちを持たせて修論研究に取り組ませている。

＜学部卒院生＞

課題をさがすのに右往左往している。「美術科授業研究」では、県下の公立校に出向き、院生自身に研究授業をさせているが、学部卒院生にとって一層よい経験になる。さらに、時間的なゆとりから、2年間で吸収することは現職教員院生に比べて相対的に多くなる。いわば、よい意味で現実にとらわれずにやれるので、自由な発想も出てくることがある。

4.2. 美術科教育分k助教授

k助教授は、平成7年(1995)着任であり、「美術科教育特論Ⅱ」(1・2年次2単位)、「美術科教育演習」(1・2年次2単位、j教授と共同で)、「美術科授業研究」(2年次2単位、i教授と共同で)を担当している。C大学着任以前に、8年間在籍したB大学でも大学院教育学研究科の設立に立ち会い、現職教員指導の経験がある。C大学では、直接的には修論指導は行っていない。

【①現職教員を大学院に受け入れることについて 利点、困難な点・改善点】

＜利点＞

「美術科授業研究」の授業では、学部卒院生に附属中などでの授業実践を課しているが、そのための教材開発・指導案作成のプロセスで、また授業記録ビデオを視聴しながらの反省会で、現職院生より現場の視点からの様々な意見助言を出してもらえるのが貴重である。加えて、現職院生の修論テーマに基づく勤務校での授業の参観も計画・実施しており、これが学部卒院生に大きな刺激を与えている。現職教員院生と学部卒院生の間でよい関係ができ、濃密なコミュニケーションが生まれ、教官自身もその中で教えられることが多い。

大学院の授業で学んだ内容を、現場に戻ってすぐに活かし検証改善することができる。

＜困難な点・改善点＞

2年目に現場に戻ってからは、職務と研究を両立させなくてはならないが、実際は研究時間が取りにくく、週1回大学に出てくるのもスケジュール的に難しい場合が多いといった状況にあ

る。この面の克服のための具体的方策が必要。

【②現職教員及び学部卒の大学院生を指導するにあたっての相違点及び工夫点】

＜現職教員院生＞

士気高く、ハングリーで食欲な学習意欲を示し、かつ、行動力があるので、この資質・姿勢を活かせるような方向で講義・演習を進めている。現職院生の主体性を尊重し、互いの距離を縮め、信頼関係をまず築くよう心がけているが、そのためにはコミュニケーションが欠かせないものとなる。

なお、大学の研究者として、現場の方に提供できる有益で多様な情報を持っておくことが大切ではないかと考えている。具体的には、大学付近の美術館の展示物を利用した鑑賞教育の授業を考案する課題に取り組んでいる。演習で、アメリカの美術教育研究誌に掲載されている鑑賞授業案を講読し、それによって得た諸視点を活かして、課題の指導案を練るようにしている。その成果は『附属教育実践研究指導センター紀要』などに院生との共著でまとめている。現職院生の場合、鑑賞授業のプランづくりに、現場での経験が生かされることになる。

＜学部卒院生＞

教育実践面での知識や経験が少ないが、柔軟性があり吸収力旺盛なので、授業ではその面に特に配慮している。現職院生が10年前後の現職経験のある先輩達であり、年齢的に＜近すぎず／遠すぎず＞という、よい関係になっているので、そこから多くのものを学び取っているようだ。結果的に、教官、現職院生双方から指導を受ける形になっている。

5. まとめ

5.1. C大学大学院、美術教育専修の事例にみるリフレッシュ教育の現状と課題

まず、現職教員院生修了者の面接をまとめると、次のようなことが明らかになった。

- (1) 現職教員院生の学習意欲は高い。そうした意欲を満たし、視野を広げると同時に心身のリフレッシュをはかる場として、概ね大学院現職教育を肯定的にみている。
- (2) 院の授業内容に対する院生のニーズは、様々である。「授業研究」以外の原論的な講義を含む授業でも、現実の姿を絡めながら進めていくと取り組みやすいと感じている。
- (3) 院2年目の現場に復帰してからの研究時間の確保が課題である。C県においては2年目に勤務校が変わることが多いので、修論の資料となる授業実践は、転勤先の環境に慣れた2学期に行うことになり、急な追い込みをせざるを得ない。また、校務についても、配慮があるとはいえず、やはり苦しい状況にある。

また、現職教員院生入学予定者の面接をまとめると、次のようなことが明らかになった。

- (4) 上記(1)にあるように、学習意欲が高く期待を持って入学しようとしている。
- (5) 上記(3)にあるような院2年目の時間的な厳しさに加え、学部は美術科のために卒業研究は制作が主であり、修論作成に対する不安もある。

指導にあたる教官の面接をまとめると、次のようなことが明らかになった。

- (6) 現職教員院生と学部卒院生との間で互いに刺激しあい、力量形成につながっていると捉えている。授業のプランづくりや公立校での「飛び込み授業」などの活動を通して、現職教員院生

は学部卒院生に教育現場の問題点を実感させる役割をはたし、逆に学部卒院生の柔軟な思考は現職教員院生の既存概念を砕くこともあるという。

- (7) 上記(3)の状況に対しては指導する立場として不満を持っている。修士論文に関しても、2年目は教育現場に戻るといった時間的な制約があるため、現場で検証できるようなテーマにせざるをえないが、選択の自由度が少なくなり残念であると考えている。
- (8) とはいえ、美術教育専攻の指導体制は、教科教育担当2名の教官を中心にしっかりと出来上がっていると考えられる。大学院担当教官が、県下各地区の研究会に関わり、自らが主催する美術教育研究会を組織することで、現場の校長との連携がスムーズにいき、大学院生の公立校での「実験的な授業の場」の設定を可能にしている。

5.2. 本学大学院美術教育専攻の新しい体制をつくるにあたって

以上のように、C大学大学院美術教育専攻の事例には、本学が現職教員受け入れの体制を再構築するにあたっての示唆が多く含まれている。最後に、上記の5.1.(1)~(8)を補足し、本学美術教育専攻の課題を明らかにすることで、まとめとしたい。

<院の授業内容>

学習意欲の高い現職教員院生に対しては、5.1.(2)にあるように院の授業内容・形式をどう設定するかがまず課題となる。修了者3名が<興味をもった講義>としては専攻科目の他に、研究科共通科目「現代教育学」をあげている。これは、教育学担当教官4人によるリレー形式の講義であるが、「進行中の教育改革（中教審議会答申の審議経過、結果など）、明治以来の学制の事、現在の学歴社会の発生の源」などの内容で、講義・ディスカッションのバランスもよくとれていたという。今回調査した院生は、全員C大学教育学部卒であり、「学部の頃にも同じような講義があったと思うが、おそらく心に響かなかった。現職教員になって、はじめて感じ取ることができた。」「現職の教員としては、持てない視点なので興味深かった。」と述べている。「授業研究」以外の原論的な講義を含む授業でも、現実の姿を絡めながら進めていくと現職院生にとっても取り組みやすいといえる。

この授業科目よりもさらに、いわゆる“原論”の度合いが強い科目や翻訳を含む演習に関しては、評価が分かれた。「大学でしかできない学習」として歓迎する者、反対に「現場に直接結びつかない」として敬遠する者の両方がいる。本学の授業をさらに充実させていく上でも、この両方のニーズをいかに取り入れるか、が鍵となろう。

<美術教育専攻の特徴を生かした授業内容、修士論文>

上記の事例をふまえて、本学大学院で筆者が担当する「美術科教育演習」「美術科教育特論Ⅱ」の内容を再構築していこうとするならば、「総合学習と美術の教科活動との関係、棲み分け」「時間数減少の中でも可能な充実した内容」「アジアの美術をふまえた鑑賞教育」などといった現在の教育現場の課題を出発点とし、教育史上の先行実践やグラウンド・セオリーなどを取り入れて追究していくことになろうか。

さらに、美術教育専攻の場合には、5.1.(5)にあるように、学部時代には実技を主体として学ぶケースが多い。この専攻の特徴である実技力、材料学といった領域で蓄積した力量は少ないのだが、この力量を修士論文研究に結びつけていくには工夫が必要である。授業の力量形成を中心におきながらも、他専攻とは別な形態のまとめ方が必要とされるのかもしれない。

<教育行政と連携の上での制度面の改善>

5.1.(3)の大学院2年目の問題は、全国共通の問題のようである。本学においても、教育行政と連携しながらこの問題を解決していかないことには充実した実践・研究は望めないといえる。大学執行部を中心として、奈良県教育委員会、現場の管理職などへの理解を求める活動も怠ってはならないと感じている。

さらに、この面接において副次的にでてきた問題として、女性教員のライフコースに配慮した研修制度のあり方がある。ライフコースを考えたときに、長期研修に出にくい状況が生まれてはいないか、点検していく必要がある。

＜教育現場との連携の上での研究指導体制の確立＞

5.1.(8)にあるように、C大学大学院美術教育専修の指導体制は、教育現場との連携の上に成立した理想的なものであると考えられる。ただ、C大学院全ての専修(教科、分野)が、こういった環境にあるのではなく、専修によって“温度差”があるという。直接に指導を受けることになる大学教官の人から、研究分野などを事前に把握せずに入学者他専修の現職教員院生の中には、トラブルに発展した事例もあったようだ。

着任10年目を迎えていたj教授は、忙しい中でも教育現場の会合・研究会にこまめに顔を出し、「人間関係」をつくる努力をし、教育現場との連携をつくりあげてきたと振り返る。制度を整えるだけでは不十分で、やはり、こうした個人としての精力的な動きが必要であろう。従来、本学でもこうした動きをしてこなかった訳ではないが、やはり足りなかったと言わざるをえない。一層、力を入れていきたい部分である。

以上の課題のうち、本学大学院美術教育専攻の現職教員院生と接する中で、取り組み始めている内容もある。この事例研究をふまえ、新しい体制の確立に向けての実践活動を随時報告・検証していきたいと考えている。

註

- 1) 教育職員養成審議会第2次答申『修士課程を積極的に活用した教員養成のあり方について－現職教員の再教育の推進』1998年10月
- 2) 本学大学院美術教育専攻美術コースでは、平成10年度に大学院設置規準14条による現職教員の入学者が1名あり、12年度にも同制度によって1名入学予定である。また、11年度には、修業年限の2年間ともに勤務しながら学ぶ夜間コースが設置され、現在1名が在籍して学んでいる。

付記

C大学大学院教育学研究科美術科教育研究室の指導教官、美術教育専修の現職教員院生(修了者、入学予定者)の方々には、格別の御配慮をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

なお、本研究を行うにあたって、平成9～11年度文部省科学研究費補助金 基盤研究(B)課題番号09480041 研究課題名「教員のリフレッシュ教育に関するシステム開発研究」(研究代表者: 奈良教育大学 松村佳子)の一部を使用しました。